

教育開発支援機構 教育開発・学習支援センター

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】（参考）

3センターともに、COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、効果的な授業形態・教育法を模索・検討し、実践してきたことは高く評価できる。

設置2年目を迎えたLFセンターは、新型コロナ禍にあって、新しい対面・オンライン教育学習に向け、高い効果を期待する柔軟な各種取り組みを実施できた点が評価できる。ポスト・コロナを見据えた長期的な視野に立って、教育学習における実効的な支援の在り方を検討し実践することを期待したい。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2023年度より専任・兼任を含めた教員向けの授業運営に関わるニーズ調査の実施を企画している。同時に学生FDスタッフ活用によるFDプロジェクトを企画するとともに、学習ステーションの活用を促進していくことで学生自らがFDに関与しつつ自主的な学びを高度化するための支援に努める。教員、学生とLFセンターのつながりを強化して一体となった教育学習支援を進めることで、長期的視点からの教育学習における実効的な支援の実践課題に対応する。

II 自己点検・評価

1 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

1.1①教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につなげるための取り組みにおける、「特色」と「課題」をそれぞれ記入してください。

特色

「教員の教育能力の向上」「教育課程や授業方法の開発及び改善」への取り組みにおいてLFセンターとしては、教員への直接支援、学部FDへの支援、全学的な支援の3層で多面的に事業を展開している点が特色としてあげることができる。教育支援を実施するユニットの他に、学生の学びをサポートするユニット、授業に関するデータを収集分析して教員、学部フィードバックするユニットを設置している。教員の教育能力の向上、授業方法の改善のために、3つの組織が有機的に連携している点も特徴である。

課題

LFセンターの実施している様々な事業メニューは充実しており各事業に有効であると認識している。しかしながら、教員（とくに兼任講師）への情報伝達に関しては現状では不十分であると認識している。従来、学部長を通して案内するチャンネルがメインとなっているが当該経路での伝達は専任教員に留まっている可能性が高い。Web掲示板、メール配信などでの情報提供はあるものの十分に関心を高めるには至っていない。専任教員だけでなく兼任講師にまでしっかりリーチすることが喫緊の課題である。また、現在展開している事業の効果を高めるためには、教員自身の「教員の教育能力の向上」「教育課程や授業方法の開発及び改善」への意識を高めることも課題の一つである。

III 2022年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	教員・教員組織
中期目標	教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	<p>研究と推進」「全学的 FD 支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LF センター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>2020 年度のコロナ禍で激変した教育学習に対して、「(1) 新しい対面・オンライン教育の教員支援」「(2) FD 支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進」「(3) 教員支援のためのデジタルイゼーション促進と DX 活用体制の構築」を専任教員・兼任講師を対象に広く支援する。さらに、「(4) 学部 FD 支援体制の構築」および「(5) 全学 FD 支援体制の構築」を確立し、組織的 FD 支援の実現を目指す。</p>	
年度目標	<p>「(1) 新しい対面・オンライン教育の教員支援」に対する取り組み予定</p> <p>(1-1) 授業相互参観の促進</p> <p>(1-2) FD 教員セミナー 3 回</p> <p>(1-3) 新任教員研修会</p> <p>(1-4) Newsletter</p> <p>(1-5) シラバス (項目・ガイドライン)</p> <p>(1-6) 授業改善アンケート実施</p> <p>「(2) FD 支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進」に対する取り組み予定</p> <p>(2-1) 授業リフレクションのための学生による授業参観</p> <p>(2-2) アカデミック・サポートサービス</p> <p>(2-3) 各種コンテンツの電子アーカイブ (LF センター年報など)</p> <p>「(3) 教員支援のためのデジタルイゼーション促進と DX 活用体制の構築」に対する取り組み予定</p> <p>(3-1) DX イニシアティブプロジェクトとの連携</p> <p>(3-2) 成績評価のあり方検討</p> <p>(3-3) IR・他アンケートとの連携</p> <p>「(4) 学部 FD 支援体制の構築」に対する取り組み予定</p> <p>(4-1) 各教授会での研修実施</p> <p>(4-2) ラーニングサポーター (教育開発支援機構主催)</p> <p>(4-3) 学生モニター制度 (教育開発支援機構主催)</p> <p>「(5) 全学 FD 支援体制の構築」に対する取り組み予定</p> <p>(5-1) 授業改善アンケート集計</p> <p>(5-2) 学外連携 (関東圏 FD 連絡会・JPFF ミーティング・FD フォーラム [大学コンソーシアム京都] など)</p> <p>(5-3) 自己点検報告書・目標設定</p>	
達成指標	<p>全 18 項目の年度目標達成率にて評価する。</p> <p>S : 80% 以上</p> <p>A : 70-79%</p> <p>B : 60-69%</p> <p>C : 60% 未満</p>	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<p>年度目標とした全18項目を達成し「S」とした (18/18=100%)。</p> <p>(1-1) 【達成】各学部から授業相互参観実施報告書を取りまとめ、HP上で公開した</p> <p>(1-2) 【達成】FD教員セミナーを3回実施した</p> <p>(1-3) 【達成】新任教員研修会を実施した</p> <p>(1-4) 【達成】Newsletterを5号発行した</p> <p>(1-5) 【達成】シラバスガイドラインについて検討した</p> <p>(1-6) 【達成】授業改善アンケートを実施した</p>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	<p>(2-1) 【達成】 授業リフレクションのための学生による授業参観を実施した</p> <p>(2-2) 【達成】 アカデミック・サポートサービスを実施した</p> <p>(2-3) 【達成】 各種コンテンツをHPで取りまとめ公開した</p> <p>(3-1) 【達成】 DXイニシアティブプロジェクトと連携した</p> <p>(3-2) 【達成】 GPAおよびGPCAデータ分析を実施した</p> <p>(3-3) 【達成】 データ活用推進ユニットにIR担当部局からメンバーを加えた</p> <p>(4-1) 【達成】 3学部の教授会で研修を実施した</p> <p>(4-2) 【達成】 ラーニングサポーターを実施した</p> <p>(4-3) 【達成】 学生モニター制度を実施した</p> <p>(5-1) 【達成】 授業改善アンケート結果を集計・分析し、その報告書を取りまとめた</p> <p>(5-2) 【達成】 関東圏FD連絡会・JPFFミーティング・FDフォーラム[大学コンソーシアム京都]にセンターメンバーが出席した</p> <p>(5-3) 【達成】 自己点検にあたり、年度目標を設定した</p>
改善策	—
評価基準	教育研究等環境
中期目標	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>2020年度のコロナ禍で激変した教育研究等環境に対して、「(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援」「(2) 対面・オンライン学習環境における学生支援」を行う。さらに、支援する対面・オンライン教育学習環境をふまえ、「(3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充」「(4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討」によって学習の高度化を目指す。また、全学DX推進計画と連携した「(5) 学生カルテによる学修支援体制の構築」により学修の個別最適化を図る。</p>
年度目標	<p>「(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援」に対する取り組み予定</p> <p>(1-1) 授業形態調査集計結果の企画・実施</p> <p>「(2) 対面・オンライン学習環境における学生支援」に対する取り組み予定</p> <p>(2-1) 授業支援アシスタント</p> <p>(2-2) 学習支援システム運営委員会の運営</p> <p>(2-3) 学習支援ハンドブック活用の検討</p> <p>(2-4) 学習環境改善検討委員会の運営</p> <p>(2-5) GPCA集計の分析</p> <p>「(3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充」に対する取り組み予定</p> <p>(3-1) HP・FB・Twitterの運営</p> <p>(3-2) アクティブラーニングセット</p> <p>(3-3) Turnitin</p> <p>(3-4) 印刷代行</p> <p>(3-5) アカデミック・サポートサービス（院生）</p> <p>(3-6) BT賞企画・実施（教育開発支援機構主催）</p> <p>(3-7) 電子アーカイブしたループブック（ゼミ用）の共有</p> <p>「(4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討」に対する取り組み予定</p>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	(4-1) ピアネット運営委員会の運営 (4-2) ピアネット合同研修会の実施 (4-3) 学習ステーションの運営 (4-4) 学生FDサミットへの参加 (4-5) プレFDの検討 「(5) 学生カルテによる学修支援体制の構築」に対する取り組み予定 (5-1) DXイニシアティブプロジェクトとの連携	
達成指標	全19項目の年度目標達成率にて評価する。 S: 80%以上 A: 70-79% B: 60-69% C: 60%未満	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	年度目標のうち全19項目を達成し「S」とした(19/19=100%)。 (1-1) 【達成】授業形態調査を企画し授業改善アンケートと同じシステムを用いて同時期に実施した (2-1) 【達成】授業支援アシスタントを実施した (2-2) 【達成】学習支援システム運営委員会を運営した (2-3) 【達成】学習支援ハンドブックを改訂し、いくつかをデジタルコンテンツとしても提供した (2-4) 【達成】学習環境改善検討委員会を運営した (2-5) 【達成】GPCAを集計し、分析を行った (3-1) 【達成】センターのHP・FB・Twitterを運営した (3-2) 【達成】アクティブラーニングセットを提供した (3-3) 【達成】Turnitinを運用した (3-4) 【達成】印刷代行を運用した (3-5) 【達成】アカデミック・サポートサービスの院生利用を実施した (3-6) 【達成】BT賞の企画・実施に協力した (3-7) 【達成】電子アーカイブしたループリック(ゼミ用)をHP上で提供した (4-1) 【達成】ピアネット運営委員会を運営した (4-2) 【達成】ピアネット合同研修会を運営した (4-3) 【達成】学習ステーションを運営した (4-4) 【達成】学生FDサミット(学生FD会議)へ参加した (4-5) 【達成】プレFD運営を開始し、オープンバッジ発行の運用を開始した (5-1) 【達成】DXイニシアティブプロジェクトと連携した
	改善策	—
<p>【重点目標】</p> <p>LFセンターで実施する50の取り組みを骨格に、2022年度は37の目標を設定した。これらの目標は、授業レベル・全学レベル・学部等レベルで整理した2022年度活動計画を立て、対面・オンライン授業が混在する教育学習において、実効的支援を主眼に実施する。また、デジタルライゼーション促進とDX活用体制が全学的に進んでおり、特に学生カルテ設定とDP活用検討を重点課題としている。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>定例リーダー会議で、中期目標を共有しながら、各取り組みの企画、実施・振り返りを行い、その議論から柔軟で効率的な支援運営を行う。デジタル化関連では、DXイニシアティブプロジェクトと連携し、センター内での議論を、教育開発支援機構内で深化させな</p>		

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

がら、機構内4センターと徹底した情報共有の協働を目指す。

【年度目標達成状況総括】

今年度は中期目標実施期の初年度であった。中期目標に沿って、年度当初に設定した取り組みは、そのほとんどを定例リーダー会議を通しながら、柔軟で効率的に実施した。例えば、当初予定になかったプレFDにおけるオープンバッジ発行は、学部長会議・研究科長会議からの要望に端を発し、教育開発支援機構の協力を得て、今年度から運用を始めた。また、重点目標だったDXイニシアティブプロジェクトとの連携について、プロジェクトが目指す「教育成果の可視化」「教育活動の可視化」「学修成果の可視化」に対し、教育開発支援機構企画委員会で複数回議論し、複数回センター内で内容を深化させ、結果として2023年度より本格リリースされる「大学DPの改定」「法政大学学びマップの作成」「個別最適な教育学修可視化システム」に貢献した。

IV 2023年度中期目標・年度目標

評価基準	教員・教員組織
中期目標	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>2020年度のコロナ禍で激変した教育学習に対して、「(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援」「(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進」「(3)教員支援のためのデジタルイノベーション促進とDX活用体制の構築」を専任教員・兼任講師を対象に広く支援する。さらに、「(4)学部FD支援体制の構築」および「(5)全学FD支援体制の構築」を確立し、組織的FD支援の実現を目指す。</p>
年度目標	<p>既存事業に関しては2022年度の実施水準を維持することで中期目標の実現に繋げる。さらに新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を図る。</p> <p>(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業リフレクションのための学生による授業参観実施 ・FD教員セミナーの実施 ・授業改善アンケートの企画・実施と分析 ・学生FDスタッフ活用によるFDプロジェクト（新規） <p>(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部等教授会へのFD研修 <p>(3)教員支援のためのデジタルイノベーション促進とDX活用体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習支援システム運営委員会の運営 ・GPA活用の検討 <p>(4)学部FD支援体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報共有による教員の授業相互参観の促進 ・学部等教授会へのFD研修 ・GPCAデータの時系列、規模別、学部別集計分析 ・GPCAデータの提供 <p>(5)全学FD支援体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・センター活動の学内PRと広報効果の測定 ・教育開発支援機構企画委員会への参加 ・FD/SDワークショップ（ミーティング） ・シラバスの点検と改善 ・教員（特に兼任講師）データの収集（新規） ・AI技術への教育学習指針の検討（新規）
達成指標	事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組み

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	<p>の実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S：80%以上 A：70-79% B：60-69% C：60%未満</p>
評価基準	教育研究等環境
中期目標	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>2020年度のコロナ禍で激変した教育研究等環境に対して、「(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援」「(2) 対面・オンライン学習環境における学生支援」を行う。さらに、支援する対面・オンライン教育学習環境をふまえて、「(3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充」「(4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討」によって学習の高度化を目指す。また、全学DX推進計画と連携した「(5) 学生カルテによる学修支援体制の構築」により学修の個別最適化を図る。</p>
年度目標	<p>既存事業に関しては2022年度の実施水準を維持することで中期目標の実現に繋げる。さらに新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を図る。</p> <p>(1)対面・オンライン教育学習環境の全学的支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業形態別アンケートの企画・実施と分析 ・Newsletterの定期発行 <p>(2)対面・オンライン学習環境における学生支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学習支援ハンドブック」の内容検討および改訂 ・学習環境改善検討委員会の運営 ・ピアネット運営委員会の運営と参加学生のデータ蓄積 <p>(3)教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アカデミック・サポート・サービスの維持 ・アクティブ・ラーニングセットの提供 <p>(4)正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Lステゼミの実施 ・プレFDプログラムの実施 <p>(5)学生カルテによる学修支援体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Haloの認知度向上策の検討（新規）
達成指標	<p>事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組みの実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S：80%以上 A：70-79% B：60-69% C：60%未満</p>
<p>【重点目標】</p> <p>早急に議論すべき課題としての「AI技術への教育学習指針の検討」に取り組む。教員の授業運営に対して、一定の参考となるような指針を可能な限り早い段階で提示することを目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>センター規程に定められた「企画プロジェクト」を立ち上げ目標に向けて議論を深める。企画プロジェクトは、センター長を軸にユニットリーダー、教育開発支援機構長、その他ユニットメンバーを柔軟に招集してプロジェクトを編成して運営する。</p>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

市ヶ谷リベラルアーツセンター

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】(参考)

3 センターともに、COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、効果的な授業形態・教育方法を模索・検討し、実践してきたことは高く評価できる。

ILACは、2017年度にスタートした新カリキュラムに基づく教育課程・教育内容の効果や課題を検証し課題解決に積極的に取り組むなど設定した目標を概ね達成できた点が評価できる。ただ、創設から約20年が経過し、ILACを取り巻く環境も変化する中、新型コロナウイルス感染症への対策など新たに対応すべき課題も増えてきていることから、今後、想定される変化にも対応できるよう長期的な視野に立った課題の検証・検討を期待したい。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

- 1) 市ヶ谷リベラルアーツセンター(以下、ILAC)では、2022年4月に開催される第1回ILAC運営委員会の審議事項として、自己点検・評価シート/中期・年度目標(=資料)の原案を共有し、ILAC運営委員会を構成する各委員が一定期間内に精査し、メール審議等によって随時加筆修正が行われることで、大学評価委員会による評価結果はILAC全体で共有され、2022年度における課題への取り組みが行われる。
- 2) 2022年度のCOVID-19の感染状況においても7つの分科会はフレキシブルに対応し、効果的でオルタナティブな授業形態・教育方法を模索・検討した。各分科会は、オンデマンド型授業の利点や工夫について検討した結果をILAC運営委員会において共有し、特に重要な項目については、回を改めその具体的な取り組みに関する情報共有を重ね実践に活かした。2023年度は、オンデマンド型授業における効果と問題点を検証するために、その教育・学習成果や履修動向について定期的なモニターを行い、それらの分析結果を踏まえ、今後必要とされるオンデマンド授業の要素を検討する資料とする。
- 3) ILACは、2017年度にスタートした新カリキュラムに基づく教育課程・教育内容の効果や課題について、スリム化や学部専門科目との乗り入れなどの観点から検証し、積み残し課題であったILAC300番台科目(学部専門科目)である教養ゼミの在り方や制度を再確認し、将来の履修者数増加に資するための課題解決に積極的に取り組んだ。教養ゼミの問題解決については、各分科会からの意見集約を図るとともに、学生モニター制度を用いた学生側の意見も踏まえ、教養ゼミに関する問題に対して、長期的ならびに短期的な対策案をまとめた。これらは2023年度以降に、随時検証していく継続課題としている。
- 4) 2023年度は、創設から約20年が経過し、ILACを取り巻く環境も変化する中、COVID-19への対策など新たに対応すべき課題も増えてきているとの指摘を踏まえ、次のカリキュラム改革の準備のための検討に着手する。そのためには、ILACと各学部との連動・協働をより充実させていくことは欠かすことのできない特に重要な課題である。また、授業形態による効果の違いや学習成果の検証とともに、経済学部移転に伴い想定される設備や環境への影響などの変化にも対応可能な課題に取り組むためにも、長期的な視野に立った課題に関する幅広い意見を聴取していく。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

1.1①学生の履修指導を適切に行っていますか。	はい
1.1②学生の学習指導を適切に行っていますか。	はい
1.1③学生の学習時間(予習・復習)を確保するための方策を行っていますか。	はい

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

1.1④それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	はい
1.1⑤シラバスの内容の適切性と授業内容とシラバスの整合性を確保していますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> ・①：2022年度各学部履修の手引き・シラバス、運営委員会資料（第8回4.(2)、第10回4.(1)） ・②：2022年度各学部履修の手引き・シラバス、Web掲示板（2022年度ILAC/市ヶ谷基礎科目・総合科目時間割表） ・③：各種ガイダンス配布資料、運営委員会資料（第8回4.(2)） ・④：2022年度各学部手引き、各学部宛依頼メール（22.6.3付）、各種ガイダンス配布資料、運営委員会資料（第3回2.(4)、第8回4.(2)） ・⑤：授業形態等のチェックを実施、運営委員会資料（第9回4.(1)、第10回3.(1)） 	

1.2 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

1.2①成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
運営委員会資料（第2回2.(13)、第4回2.(15)、第6回2.(9)、第9回2.(10)）	

1.3 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

1.3①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定をしていますか。	はい
1.3②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標に基づき学生の学習成果を把握していますか。	はい
1.3③学習成果を可視化していますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> ・①：運営委員会資料（第4回2.(15)、第9回2.(10)、4.(1)） ・②：運営委員会資料（第2回2.(13)、第6回2.(9)） ・③：運営委員会資料（第2回2.(13)、第4回2.(15)(20)(21)、第6回2.(9)、第10回3.(1)） 	

1.4 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。
また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

1.4①授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	はい
1.4②大学評価室による学生調査結果（入学前アンケート・1年生アンケート・卒業生アンケート）を組織的に利用していますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> ・①：desknet'sにて確認可、運営委員会資料（第8回4.(2)） ・②：運営委員会資料（第4回2.(15)(20)(21)、第10回3.(1)） 	

(2) 特色・課題

以下の項目の中で、リベラルアーツセンターとして特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、記入してください。
【教育課程・教育内容】【教育方法】【学習成果】 それぞれの項目の中で「特色」または「課題」を選択し、内容について記入してください。
【教育課程・教育内容】

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<ul style="list-style-type: none"> ・幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程の編成 ・初年次教育・高大接続への配慮 ・学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育の適切な実施 	
課題	幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程の編成
<p>以下の課題に取り組む予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 履修登録の利便性に資する可能性がある 2021 年度カリキュラムマップ・ツリーの可視化 2) 多様な学びの観点から ILAC 科目の今後について検討する 3) ILAC ならではの特徴となる学部横断的な初年次教育の在り方 4) ILAC 科目と学部専門科目の双方が有するリソース等の効率的な活用 5) 次のカリキュラム改革に資する情報収集 	
<p>【教育方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等） ・授業がシラバスに沿って行われているかの検証（後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等） 	
特色	授業がシラバスに沿って行われているかの検証（後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）
<p>後シラバスの利用率を上げるために ILAC 事務を通じて後シラバスの記入を呼びかけた。その結果、ILAC では大幅に利用率が上昇し、2022 年度の利用率は 62.2%であった。教員授業相互参観では、各分科会においておこなわれた授業参観は対面が 7 割であった。各分科会報告の内容から、熱心に参加する様子がみられ、そこで得られた成果について、報告書には充実した内容が記載されていた。教員相互の情報交換会も非常に重要な試みであることが共有されており、英語分科会では、40 名という大きな規模で開催され、40 名をさらに小グループに分けての懇談会を実施し、細やかな対応をはかるなど、積極的な取り組みが行われている。</p>	
<p>【学習成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価及び単位認定を行うための制度や学位授与の実施手続き及び体制についての適切な運用。 ・学習成果を把握する取り組み ・学習成果を定期的に検証し、その結果をもとにした教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組み 	
特色	学習成果を把握する取り組み
<p>授業改善アンケートや GPCA 分布、卒業生・新入生アンケート等の結果を把握し、検証するとともに、ILAC 科目における成績分布の検証により、学習成果の把握・評価にも努めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生アンケートにおいては、教養教育に着目した満足度等に関する集計結果をめぐり、意見交換を行い ILAC における認識を共有している。 	
<p>その他、上記項目以外でリベラルアーツセンターとして「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。</p>	
特色	
課題	

2 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

2.1①センター内のFD活動は組織的に行われていますか。	はい
2.1②上記項目について【はい】と回答した場合は、2022年度のFD活動の実績（開催日・テーマ・参加人数）を記入してください。	
運営委員会資料（第4回3.(2)）、（第11回議事次第、2.(8)_01_2022年度教員授業相互参観実施状況報告書とりまとめ結果について（1））	

Ⅲ 2022年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
中期目標	2018～2021年度の期間では2017年度にスタートした新カリキュラムに基づく教育課程・教育内容の効果や課題が検証されてきた。それらを踏まえ、2022～2025年度の期間では、スリム化や学部専門科目との乗り入れなどこれからの課題を視野に入れつつ、次のカリキュラム改革に向けての準備を行う。また、現状のカリキュラムにおいても、学生がILAC科目を把握し易くするとともに、履修し易くなるよう改善を図る。	
年度目標	<ul style="list-style-type: none"> スリム化の計画を具体化させる。 ILAC科目と学部専門科目の乗り入れ可能性を検討し、そのための基本ルールを構築する。 2021年度から検討を開始したカリキュラムマップ・ツリー可視化プロジェクトをさらに進める。 	
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ILAC全体ならびに各分科会で具体的なスリム化案を作成する。 ILACと各学部とで科目の乗り入れについて検討を行い、基本ルールを作成する。 ILAC内部あるいは他組織と共同で、カリキュラムマップ・ツリーの可視化や履修登録の際の利便性について検討を開始する。 	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	<ul style="list-style-type: none"> スリム化については各分科会での検討を経て、第1・5・7～10回ILAC運営委員会で審議を重ね、ILACのスリム化案を作成した。 ILAC科目と各学部専門科目との乗り入れについては、文学部のカリキュラム改革の審議を通じて検討を行うとともに、意見交換会（懇談会）を開催して、基本的な方針等を検討した。 カリキュラムマップ・ツリーの可視化や履修登録の利便性についてはILAC執行部と関連部局とで実現可能な方向性や具体的な方法の検討を行ったが、ILAC全体の場で審議するまでには至らなかった。一方で、履修登録の利便性を図るために、ILAC科目の体系が把握し易くなるにカリキュラム紹介動画を改善し、それを各学部のオリエンテーションにて説明してもらうよう依頼した。さらに、それら動画をYoutubeにアップロードし、履修登録の際に学生が参照し易くなるようにした。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> 次年度には、科目の種類や内容を可視化する形で履修登録できるよう利便性を向上させられる方策を関連部局と検討し、具体化させるようにする。
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
中期目標	少人数授業や多人数授業、対面授業やリアルタイムオンライン授業、オンデマンド授業など授業形態・科目特性に合った工夫や効果的な取り組みを整理するとともに、実際の授業に取り入れられるようにする。また、後シラバスを積極的に活用することで、教員自身が授業の取り組みについて自	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	己評価を行えるようにする。	
年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・オンデマンド型・資料配布型の授業に合う科目をリストアップするとともに、それらの授業における工夫や効果的な取り組みについて情報共有を図る。 ・後シラバスを積極的に活用するための方策について議論を行う。 	
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・オンデマンド型・資料配布型授業における利点や工夫、効果的な取り組みをまとめた一覧表を作成し、ILAC 運営委員会にて提示する。 ・後シラバスの利用率を上げる。 	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・オンデマンド型授業の利点や工夫については、分科会ごとにそれらの内容について取りまとめてもらい、第 8 回 ILAC 運営委員会にて情報を共有した。また、特に重要な項目については、その具体的な取り組みについて第 10 回 ILAC 運営委員会にて報告がなされた。 ・後シラバスの利用率を上げるために、ILAC 事務を通じて後シラバスの記入を呼びかけた。その結果、ILAC では大幅に利用率が上昇し、2022 年度の利用率は 62.2%であった。
	改善策	—
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
中期目標	授業形態や科目特性によって授業における工夫や効果的な取り組みは異なるのと同様に、授業形態や科目特性によって学習成果の評価指標は異なることから、それぞれに即した学習成果の評価指標を考える必要がある。また、それぞれの工夫や効果的な取り組みが学習成果に及ぼす影響を検証する。	
年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン授業の効果や学習成果と対面授業の効果や学習成果との比較を検証する。 ・オンデマンド型・資料配布型の授業における学習成果の適切な評価指標を検討するとともに、それら授業における工夫・効果的な取り組みが学習成果に及ぼす影響を検証する。 	
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・2020 年度および 2021 年度におけるオンライン授業の効果や学習成果と、2022 年度における対面授業の効果や学習成果について整理し、両者の比較を ILAC 運営委員会にて検証する。 ・オンデマンド型・資料配布型の授業における学習成果の適切な評価指標や、授業時における工夫・効果的な取り組みについて意見聴取を行い、その結果を ILAC 運営委員会にて検証する。 	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン授業と対面授業の効果や学習成果については、各分科会で意見を集約した結果に関し、第 4・9 回 ILAC 運営委員会にて履修者動向分析の中で情報を共有し、検証した。 ・オンデマンド型および資料配布型の授業における学習成果の適切な評価指標や授業時における工夫・効果的な取り組みについては個別で意見聴取を行い、その内容を第 10 回 ILAC 運営委員会にて検証した。
	改善策	—
評価基準	教員・教員組織	
中期目標	スリム化や次のカリキュラム改革など現在ならびに今後直面する課題に対応するために、現状に即した ILAC のあり方を検討する必要がある。また、2017～2021 年度に 6 学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化を	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

		図ってきたが、今後はそれらの動向をさらに進めるために、ILAC と各学部との連動・協働をより充実させていくことが課題である。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・教養教育を担う組織として、現状の ILAC の長所や短所について検討を行う。 ・2021 年度の内部質保証委員会における答申を踏まえ、ILAC の各分科会と各学部の連動・協働を促進させる。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ILAC の組織および所属教員を規程する内規 12 条に関し、その規程を維持することによる長所や短所、廃止することによる長所や短所、また修正すべき内容などについて意見聴取を行い、ILAC 運営委員会にて検討する。 ・審議事項に合わせて、適宜、ILAC の各分科会委員長と各学部の教授会主任との意見交換会を開催し、その審議内容は ILAC と各学部で共有する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・ILAC の内規 12 条の長所や短所については、各分科会にて意見の集約を行い、第 2・3 回 ILAC 運営委員会にて検討を行った。 ・カリキュラム改革ならびに科目の乗り入れに関する議題について、各分科会委員長ならびに各学部の教授会主任との意見交換会（懇談会）を実施し、その内容の共有を図った。
	改善策	—
評価基準		教育研究等環境
	中期目標	上記の教育方法や学習成果の項目と連動し、科目特性に応じた授業形態を再検討するとともに、それらの授業形態における必要な設備や環境について検討する。また、2017 年度にスタートした新カリキュラムにおける積み残し課題である教養ゼミのあり方や制度、履修促進について検討する。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・大人数授業やオンデマンド型・資料配布型の授業において必要な設備や環境について検討する。 ・現状の教養ゼミの問題点を整理し、そのあり方や制度、履修促進の方法について検討する。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・大人数授業やオンデマンド型・資料配布型の授業において必要な設備や環境について、教員ならびに学生双方の意見を整理し、ILAC 運営委員会にて検討する。 ・教養ゼミのあり方や制度、問題点、履修促進の方法について ILAC 運営委員会にて検討する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・大人数授業やオンデマンド型授業で必要な設備や環境については、同授業を担当する教員の意見を聴取した。また、学生の意見については授業改善アンケートの内容を分析することで確認した。それらの内容については第 10 回 ILAC 運営委員会にて検討した。 ・教養ゼミのあり方や制度、問題点、履修促進の方法については各分科会にて意見集約し、第 5・6 回 ILAC 運営委員会にて検討した。また、学生モニター制度を用いて教養ゼミについて学生側の意見を聴取し、その内容を第 7・8 回 ILAC 運営委員会にて検討した。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度以降、オンデマンド型授業を行う科目についてはその効果や問題点、必要な設備や環境、履修動向についてモニターし、それを ILAC 運営委員会にて共有・検討することになっている。それらの内容を分析することで、オンデマンド授業に必要な要素を検討していく。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

		・学生モニタでの意見聴取を踏まえ、学部横断的な科目案設置の検討を行う。
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」、「課題解決型フィールドワーク」のように、ビジネス社会など外部と繋がりを持ち、現代社会で必要なリテラシーを修得できる科目を充実させる。また、学外からの受講者を呼び込むサーティフィケート・プログラムや公開講座について、ILACの組織および教員が中心となって検討する。
年度目標		<ul style="list-style-type: none"> ・「課題解決型フィールドワーク」として開講する科目を充実させる努力をする。また、外部組織が関わる新規の寄付講座の開設について検討する。 ・学外向けのサーティフィケート・プログラムや公開講座について検討する。
達成指標		<ul style="list-style-type: none"> ・「課題解決型フィールドワーク」の応募数を増加させる。 ・新規の寄付講座の開設可能性について検討する。 ・ILACを中心とする学外向けのサーティフィケート・プログラムや公開講座の実施可能性を検討するとともに、具体的な候補案を検討する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・「課題解決型フィールドワーク」の応募状況についてはILAC運営委員会にて情報共有を行ったが、ILACとして応募数増加の検討をするには至らなかった。 ・ILACを中心とする学外向けのサーティフィケート・プログラム、公開講座についてはILAC執行部内での検討に留まり、ILAC全体での検討には至っていない。 ・現行の寄付講座であるリベラルアーツ特別講座・同実習の運用については、講座の提供元であるイオンフィナンシャルサービス株式会社と打ち合わせを重ねて改善を図りながら運用しており、その動向は適宜ILAC運営委員会にて情報共有を図っている。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・「課題解決型フィールドワーク」は全学共通教育プラットフォームに移行して運用することになるため、ILACの所管ではなくなる。 ・リベラルアーツ特別講座・同実習については、今後も講座の提供元であるイオンフィナンシャルサービス株式会社と協議を密に取りながら運用していく。なお、社会連携教育センターが発足し、寄付講座は同センターに集約される可能性があるため、これらの科目の所管および今後の運用についても該当部局も含めて検討を行うことになる。 ・ILACの豊富な人的リソースを生かすための一例として、サービス・ラーニングの検討を行う。
<p>【重点目標】 コロナ禍でのオルタナティブな授業のあり方を検討し、またスリム化への対応を図る中で、ILACのあり方がいま一度問われていることから、今年度は現状に対応し、今後のさまざまな変革を見据えた上でILACのあり方について検討していきたい。また、ILACだけでなく、各学部との関係性も視野に検討を行う。さらに、2017年度にスタートした新カリキュラムの有効性や課題が明らかになってきた現状を踏まえ、次のカリキュラム改革の検討の準備に着手する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ILACの内規12条の長所や短所について意見聴取を行い、整理した上で検討を行う。 ・必要に応じて各分科会委員長と各学部教授会主任との意見交換会を開催し、ILACと各学部の適切な関係性を模索する。 		

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>・次のカリキュラム改革にて対応すべき事項や ILAC として強化を図りたい事項について幅広く意見聴取を行っていく。</p>
<p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>本年度の重点項目としては、① ILAC の内規 12 条の長所や短所を検討し、そのあり方を再確認すること、および②次のカリキュラム改革に向けて ILAC として対応すべきことや強化を図ることの検討を開始することであった。①については各分科会ならびに ILAC 全体で検討を重ね、現状としての結論ならびに今後に向けての課題を確認することができた。また、②については、文学部のカリキュラム改革に関連する検討事項や ILAC 科目と学部専門科目の乗り入れに関する方針・姿勢についての検討、教養ゼミのあり方や履修促進の検討、オンデマンド授業のあり方の検討を通じて幅広く意見聴取を行い、共通理解や今後の課題を確認することができた。ただし、今後の課題への対応や方針・ルールの共有については具体的な検討には至っていないので、次年度以降の課題となる。また、今年度は分科会委員長や学部教授会主任との意見交換会（懇談会）を 1 回しか開催しなかったが、次年度以降は可能であればもう少し多くの回数を開催することで、より積極的な意見交換を行うことが望ましいと考える。</p>

IV 2023 年度中期目標・年度目標

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	<p>2018～2021 年度の期間では 2017 年度にスタートした新カリキュラムに基づく教育課程・教育内容の効果や課題が検証されてきた。それらを踏まえ、2022～2025 年度の期間では、以下の課題に取り組む。</p> <p>1 > スリム化や学部専門科目との乗り入れ等、これからの課題を視野に入れつつ、次のカリキュラム改革に向けての準備を行う</p> <p>2 > 現状のカリキュラムにおいても、学生が ILAC 科目を把握し易くするとともに、履修し易くなるよう改善を図る</p>
年度目標	<p>1 > スリム化や学部専門科目との乗り入れ等、これからの課題を視野に入れつつ、次のカリキュラム改革に向けての準備を行う。</p> <p>1) スリム化計画を推進するために各分科会のスリム化進捗状況を確認し、ILAC 科目と学部専門科目の双方にあるリソース等の効率的な活用方法を検討する</p> <p>2) 多様な学びの観点から ILAC 科目の今後について検討する</p> <p>3) 次のカリキュラム改革の準備について意見聴取を行う</p> <p>2 > 現状のカリキュラムにおいても、学生が ILAC 科目を把握し易くするとともに、履修し易くなるよう改善を図る。</p> <p>4) 2021 年度に実施したカリキュラムマップ・ツリー可視化プロジェクトの成果の一部は履修登録の利便性に資する可能性があるため、その具現化に向けた検討を始める</p> <p>5) ガイダンス用コンテンツに関して学部からの意見を聴取し現行のコンテンツを点検する</p>
達成指標	<p>年度目標に掲げた 1) ～ 5) に対して、以下の基準で達成率を評価する</p> <p>S: 80-100% (目標を十分達成し、質の向上が顕著である)</p> <p>A: 70-79% (目標をほぼ達成し、質の向上が見られる)</p> <p>B: 60-69% (目標の達成が不十分である)</p> <p>C: 60%未満 (目標が達成できていない)</p>
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	<p>ILAC における組織的な教育・学習成果に対して以下の課題に取り組む。</p> <p>1 > 少人数授業や多人数授業、対面授業やリアルタイムオンライン授業、オンデマンド授業など授業形態・科目特性に合った工夫や効果的な取り組みを整理するとともに実際の授業に取り入れられるようにす</p>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	る。 2 > 後シラバスを積極的に活用することで、教員自身が授業の取り組みについて自己評価を行えるようにする。
年度目標	1 > 少人数授業や多人数授業、対面授業やリアルタイムオンライン授業、オンデマンド授業など授業形態・科目特性に合った工夫や効果的な取り組みを整理するとともに、実際の授業に取り入れられるようにする。 1) 各分科会が有するグッドプラクティスを共有し、その後の活用を促進するために分科会活動報告を実施する 2) コロナ禍後に加速した新しい授業形態と言える「対面型授業とオンライン型授業がブレンドされた授業形態」の教育効果・学習成果を検証する 3) ILAC 科目において現在行われている二表教員と一表教員のコラボレーション科目等を参考に、学部専門科目との乗り入れの可能性について意見聴取する 2 > また、後シラバスを積極的に活用することで、教員自身が授業の取り組みについて自己評価を行えるようにする。 4) 後シラバスで得られた結果の活用方法を検討するために、学生からの意見やその他の客観的指標を活用した分析等の方策を検討する
達成指標	年度目標に掲げた 1) ~ 4) に対して、以下の基準で達成率を評価する S: 80-100% (目標を十分達成し、質の向上が顕著である) A: 70-79% (目標をほぼ達成し、質の向上が見られる) B: 60-69% (目標の達成が不十分である) C: 60%未満 (目標が達成できていない)
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	授業形態や科目特性によって授業における工夫や効果的な取り組みは異なるのと同様に、授業形態や科目特性によって学習成果の評価指標は異なることから、それぞれに即した学習成果の評価指標を考える。 1 > 各科目の工夫や効果的な取り組みが学習成果に及ぼす影響を検証する
年度目標	1 > 各科目の工夫や効果的な取り組みが学習成果に及ぼす影響を検証する。 1) 教員・学生からの聞き取りや、授業改善アンケート、および HALO を活用した分析を通じて、学習成果に関する経年的な分析を行う 2) オンデマンド授業の効果を検証するために定期的なモニターを実施し、その結果を共有する
達成指標	年度目標に掲げた 1) ~ 2) に対して、以下の基準で達成率を評価する S: 80-100% (目標を十分達成し、質の向上が顕著である) A: 70-79% (目標をほぼ達成し、質の向上が見られる) B: 60-69% (目標の達成が不十分である) C: 60%未満 (目標が達成できていない)
評価基準	教員・教員組織
中期目標	スリム化や次のカリキュラム改革など現在ならびに今後直面する課題に対応する。 1 > 現状に即した ILAC のあり方を検討する 2 > 2017~2021 年度に 6 学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化を図ってきたが、今後はそれらの動向をさらに進めるために、ILAC と各学部との連動・協働をより充実させていく
年度目標	1 > 現状に即した ILAC のあり方を検討する。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	<p>1) ILAC 運営委員会規程および内規 12 条による組織的な教育実施上の役割分担、責任体制を確認するとともに、この規程を維持することについて意見聴取を行い、必要に応じて検討を行う</p> <p>2) ILAC における課題を共有し、より適切で有効な組織的運営を可能とするための分科会委員長と学部主任懇談会を適宜実施する</p> <p>3) 各分科会による授業相互参観、新任教員を対象とした授業参観による研修、録画記録によるセルフレビューによるセルフ授業参観、教員相互授業情報交換会の結果を共有し、分科会相互の教育の質的向上を図る</p> <p>2 > 2017～2021 年度に 6 学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化を図ってきたが、今後はそれらの動向をさらに進めるために、ILAC と各学部との連動・協働をより充実させていく。</p> <p>4) 教育開発・学習支援センターが実施したアンケート結果を活用する</p> <p>5) ILAC におけるより適切な組織的運営に資する効果的な執行部体制を構築する</p> <p>6) 内部質保証委員会を年度末に開催し、ILAC における 2023 年度の課題に対する取り組み結果を検証する</p>
達成指標	<p>年度目標に掲げた 1) ～ 6) に対して、以下の基準で達成率を評価する</p> <p>S: 80-100% (目標を十分達成し、質の向上が顕著である)</p> <p>A: 70-79% (目標をほぼ達成し、質の向上が見られる)</p> <p>B: 60-69% (目標の達成が不十分である)</p> <p>C: 60%未満 (目標が達成できていない)</p>
評価基準	教育研究等環境
中期目標	<p>上記の教育方法や学習成果の項目と連動した以下の課題に取り組む。</p> <p>1 > 科目特性に応じた授業形態を再検討するとともに、それらの授業形態における必要な設備や環境について検討する</p> <p>2 > 2017 年度にスタートした新カリキュラムにおける積み残し課題である教養ゼミのあり方や制度、履修促進について検討する</p>
年度目標	<p>1 > 科目特性に応じた授業形態を再検討するとともに、それらの授業形態における必要な設備や環境について検討する。</p> <p>1) 学生モニター制度を活用し、ILAC 科目の教育体系、学際的な科目の意義、学部専門科目との乗り入れ等に関して収集した学生の認知や意見について検討する</p> <p>2) オンデマンド型授業を行う科目の教育的効果の検証は、履修者数動向、教員相互授業参観、HALO 等の客観的指標等を分析し、オンデマンド授業に必要な要素を模索する</p> <p>2 > 2017 年度にスタートした新カリキュラムにおける積み残し課題である教養ゼミのあり方や制度、履修促進について検討する。</p> <p>3) 学生モニター制度や履修者動向および教室使用状況等の分析を通じ、授業形態に応じた設備や環境を検討する</p> <p>4) 教養ゼミにおける履修者数増加のための改善策は教育効果および履修者動向によって確認した結果を共有し検討を行う</p>
達成指標	<p>年度目標に掲げた 1) ～ 4) に対して、以下の基準で達成率を評価する</p> <p>S: 80-100% (目標を十分達成し、質の向上が顕著である)</p> <p>A: 70-79% (目標をほぼ達成し、質の向上が見られる)</p> <p>B: 60-69% (目標の達成が不十分である)</p>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	C : 60%未満 (目標が達成できていない)
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	<p>社会貢献・社会連携に対して以下の課題に取り組む。</p> <p>1 > 「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」、「課題解決型フィールドワーク (2023 年度より全学共通プラットフォーム科目・社会連携教育科目群)」のように、ソーシャルビジネス等の外部と繋がりを持ち、現代社会で必要なリテラシーを修得できる科目を充実させる</p> <p>2 > また、学外からの受講者を呼び込むサーティフィケート・プログラムや公開講座について、ILAC の組織および教員が中心となって検討する</p>
年度目標	<p>1 > 「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」、「課題解決型フィールドワーク」のように、ソーシャルビジネス等の外部と繋がりを持ち、現代社会で必要なリテラシーを修得できる科目を充実させる。</p> <p>1) リベラルアーツ特別講座・同実習に関して社会連携教育センターと発展的な協議を行う</p> <p>2 > 学外からの受講者を呼び込むサーティフィケート・プログラムや公開講座について、ILAC の組織および教員が中心となって検討する。</p> <p>2) ILAC の豊富な人的リソースを活用した社会貢献・連携事業の一例として、サービス・ラーニングの検討を行う</p>
達成指標	<p>年度目標に掲げた 1) ~ 2) に対して、以下の基準で達成率を評価する</p> <p>S : 80-100% (目標を十分達成し、質の向上が顕著である)</p> <p>A : 70-79% (目標をほぼ達成し、質の向上が見られる)</p> <p>B : 60-69% (目標の達成が不十分である)</p> <p>C : 60%未満 (目標が達成できていない)</p>
<p>【重点目標】</p> <p>創設から約 20 年が経過し、ILAC を取り巻く環境も変化する中、新型コロナウイルス感染症への対策など新たに対応すべき課題も増えてきていることから、今後、想定されうる変化にも対応できるよう長期的な視野に立った課題を検討していく必要がある。特に、今年度は現行カリキュラムの運用開始から 7 年目を迎えるため、次のカリキュラム改革の準備について検討を始めたい。各分科会と各学部との関係性を視野にいたした検討を準備し、カリキュラム改革の骨格に関する策定および論点整理に着手することを重点課題とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>1) ILAC の特徴となる科目および授業形態等の教育システムについて、意見聴取を幅広く行う。</p> <p>2) 全学的に進んでいるデジタルイノベーションと DX 等を活用し、現行カリキュラムの教育効果・学習成果を分析し、ILAC 科目と学部専門科目の双方にあるリソース、全学共通教育プラットフォームとの連携等の効率的な活用方法を検討する。</p> <p>3) ILAC における次のカリキュラム改革の策定に着手するため、現行カリキュラムの課題整理や集中的に検討が必要な項目の論点整理を行う等、次のカリキュラム改革の準備について意見聴取を行う。</p>	

小金井リベラルアーツセンター

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】(参考)

3センターともに、COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、効果的な授業形態・教育方法を模索・検討し、実践してきたことは高く評価できる。

KLACでは、分科会ごとに、コロナ禍にあって、科目の特性に応じた教育研究環境を検討することで、教養教育の充実を図るとともに、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図ってきたことは高く評価できる。ポスト・コロナを見据えて、これまで以上に、教員同士の連絡を密にし、情報共有を図るとともに、新たな教授法の検討に取り組むなどなお一層の教養教育の充実を図ることを期待したい。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

- ・2022年度大学評価結果総評は、KLAC運営委員会において関係者に共有した。
- ・2023年度からの新カリキュラムでは、理系教養科目の充実を図るとともに、理科分科会・数学分科会で、それぞれリメディアル科目を新設・増設して、教養教育のいっそうの充実をはかった。また多様な価値観を育成できるよう、諸語科目を多くの学生が履修しやすいように改編したり、人文・社会科学分科会の科目として新たに「宗教と社会」を開講するなどした。
- ・2023年度年度目標のひとつとして、こうしたカリキュラム改編に応じた履修指導・学習指導をおこない、新カリキュラムへのスムーズな移行をはかることを掲げた。また、ポスト・コロナを見据え、対面授業への復帰を進めるにあたって、さまざまな授業形態において、より教育効果の高い授業方法を検討する。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

1.1①学生の履修指導を適切に行っていますか。	はい
1.1②学生の学習指導を適切に行っていますか。	はい
1.1③学生の学習時間(予習・復習)を確保するための方策を行っていますか。	はい
1.1④それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	はい
1.1⑤シラバスの内容の適切性と授業内容とシラバスの整合性を確保していますか。	はい

【根拠資料】

- 1.1①
- ・理工学部生のための履修の手引き・生命科学部生のための履修の手引き
 - ・各学科の入学時ガイダンス資料
 - ・語学ガイダンス資料(英語・諸語)
- 1.1②
- ・2022年度ラーニング・サポーター申請書兼実施報告書
 - ・2022年度KLAC授業における授業支援アシスタント採用数(2023年2月21日)
 - ・冊子「英語上達への道」(Hondanaに掲載)
 - ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲガイダンス資料
 - ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ事前アンケート
 - ・科学実験Ⅱ資料「レポートの書き方」「レポートチェック事項」
- 1.1③
- ・Webシラバス
- 1.1④

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<ul style="list-style-type: none"> 理工学部生のための履修の手引き・生命科学部生のための履修の手引き 科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける履修者数推移調査 <p>1.1⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> KLAC 運営委員会資料・議事録 外国語授業打ち合わせ会（3月22日実施）案内および当日資料など、各分科会懇談会及び業務連絡資料

1.2 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

1.2①成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> 英語科目時間割表（レベル別） 英語分科会成績分布ガイドライン 外国語授業打ち合わせ会 実施案内（メール）および当日資料 線形代数学演習Ⅰ統一問題，線形代数学及び演習Ⅱ統一問題 科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ担当者会議議事録 	

1.3 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

1.3①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定をしていますか。	はい
1.3②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標に基づき学生の学習成果を把握していますか。	はい
1.3③学習成果を可視化していますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> TOEIC 実施結果・集計結果 英語教育改善プロジェクト資料・議事録 線形代数学演習Ⅰ期末試験の成績比較資料 科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける独自アンケート調査 	

1.4 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。
また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

1.4①授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	はい
1.4②大学評価室による学生調査結果（入学前アンケート・1年生アンケート・卒業生アンケート）を組織的に利用していますか。	はい
【根拠資料】	
理工学部教授会配布資料・議事録、生命科学部教授会配布資料・議事録	

(2) 特色・課題

以下の項目の中で、リベラルアーツセンターとして特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、記入してください。	
【教育課程・教育内容】【教育方法】【学習成果】それぞれの項目の中で「特色」または「課題」を選択し、内容について記入してください。	
【教育課程・教育内容】	
<ul style="list-style-type: none"> 幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程の編成 初年次教育・高大接続への配慮 学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育の適切な実施 	
特色	初年次教育・高大接続への配慮

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>小金井リベラルアーツセンターでは、以下のような点で、初年次教育・高大接続への配慮をおこなっている。具体的には以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リメディアル科目：2023年度より、リメディアル科目の提供を拡大した。具体的には、生命科学部生用に「入門化学」「入門生物学」を新設するとともに、従来理工学部生のみが対象だった「入門数学」「入門物理学」を生命科学部生にも開放した。 ・必修の英語科目では、学生によって英語のレベルが異なることに対応するため、レベル別クラス編成をおこなっている。 ・諸語科目では、2023年度にカリキュラム変更をおこない、選択科目として初級科目を履修する際、より多くの曜限から選択できるようにした。 ・リテラシー科目では、高等学校までの基本的なパソコン操作の習熟度を調査し、それに基づいたテキストの作成および TA やラーニング・サポーターによるサポートを実施している。 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲではガイダンス時に事前アンケートをとり、高校での理科履修状況を調査している。理工学部では化学、生物の履修率が低く、生命科学部では物理の履修率が低い傾向にあった。そのため、高校で理科科目を未履修であっても学生が対応できるように、教材資料を初年次向けに作成している。また、理科科目が未履修の学生に対しては、TA がよりきめ細やかな学習指導を行っている。 	
<p>【教育方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等） ・授業がシラバスに沿って行われているかの検証（後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等） 	
特色	<p>教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）</p>
<p>小金井リベラルアーツセンターでは、ハイフレックス授業に対応して、効果的な授業を行なうための努力をおこなった。具体的には以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハイフレックス授業を全面的に実施するにあたり、各分科会が中心となり、職員の協力を得て、兼任講師のサポート体制（機材の接続方法、PCの貸出、トラブル対応など）を充実させた。また、 ・数学分科会では、対面による試験と非対面による試験の間の教育効果の測定結果を定性的に比較し検討した。 ・理科分科会管轄の69科目のうち、61科目が対面、8科目がオンラインであった。土曜開講の生物学基礎は、オンライン実施により履修者が顕著に増加した。 ・理科分科会の科学実験では、動画を含めたオンライン教材を利用することで、対面授業とオンライン授業を円滑に切り替え可能な実習スケジュールを構築した。本年度は「情報リテラシーと表現技術」で学生にPC操作を習得させた上で、「科学実験Ⅰ（物理学実験）」でPCソフト使用法の理解を深める授業間の連携を試み、学習効果を上げることに成功した。 	
<p>【学習成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価及び単位認定を行うための制度や学位授与の実施手続き及び体制についての適切な運用。 ・学習成果を把握する取り組み ・学習成果を定期的に検証し、その結果をもとにした教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組み 	
特色	<p>学習成果を把握する取り組み</p>
<p>小金井リベラルアーツセンターでは、さまざまな分科会において、学習成果を把握し、教育内容・方法の向上に役立てる取り組みを行なっている。具体的には以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語科目においては、学生が継続的に受験している TOEIC の点数を、学習成果を測定・把握する指標の一つとして利用し、英語教育改善プロジェクトによって各学科と共有している。また成績分布の目安を定めたガイドラインを作成し、兼任講師に展開して 	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>いる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リテラシー科目では、学生が行ったプレゼンテーションや演習課題に対し、教員が試問することにより、理解度を把握している。 ・数学分科会では例年、統一試験を実施して指標の1つとしている。 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、実験作業や実験ノートの確認、レポートに関する試問等により実験内容の理解度・到達度を把握・評価するようにしている。
<p>その他、上記項目以外でリベラルアーツセンターとして「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。</p>
<p>特色</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小金井リベラルアーツセンターのその他の特色として、各分科会の連携に優れている点が挙げられる。専任教員の多くが複数の分科会にまたがって所属しているため、多角的な視点を持ち、KLAC全体としてのバランスを取りながら業務にあたっている。
<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上記の特色の反面、業務が複数の分科会にまたがることから、多くの専任教員が業務過多に陥りがちなことが課題である。 ・また分科会によっては、科目の特性上、多くの兼任講師が授業を担当している。そのため、定年やその他の都合によって兼任講師が退職した際、後任として、KLACの申し合わせを適切に満たす講師を手配することも課題となっている。

2 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

2.1①センター内のFD活動は組織的に行われていますか。	はい
2.1②上記項目について【はい】と回答した場合は、2022年度のFD活動の実績（開催日・テーマ・参加人数）を記入してください。	
<p>2022年度には、以下の通り、相互授業参観を7回実施した。参観した教員は、指定の報告書を記入し各分科会単位でとりまとめ、運営委員会で情報共有を行った。今年度は報告書の書式を改訂し、分科会の垣根をまたいだ参観を行いやすいようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2022年4月11日 授業名：微分積分学演習Ⅰ（数学分科会） 授業担当教員：塚田和美 授業参観教員：間下克哉 ・2022年6月16日 授業名：情報リテラシーと表現技術（リテラシー分科会） 授業担当教員：三牧宏彬 授業参観教員：小鍋哲 ・2022年6月29日 授業名：物理学基礎Ⅰ（理科分科会） 授業担当教員：小鍋哲 授業参観教員：水澤直樹 ・2022年7月11日 授業名：アカデミック・リーディングⅡ（英語分科会） 授業担当教員：磯部芳恵 授業参観教員：小畑美貴 ・2022年11月29日 授業名：線形代数学及び演習Ⅱ（数学分科会） 授業担当教員：佐藤巖 授業参観教員：三橋秀生 ・2022年12月9日 授業名：スポーツ健康科学講義Ⅰ（スポーツ健康科学分科会） 授業担当教員：水野沙洗 授業参観教員：金光、越智、街、高田 ・2023年1月16日 授業名：比較文化論（人文・社会科学分科会） 授業担当教員：横山泰子 授業参観教員：元木淳子（諸語分科会） 	

III 2022年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	内部質保証
中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

年度目標	運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検を行い、内部質保証を維持する。	
達成指標	自己点検委員会を開催する。	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	自己点検委員会を3回にわたって開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検状況を検討した。
	改善策	特になし。次年度も引き続き、自己点検委員会を開催することが望ましい。
評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
中期目標	カリキュラム変更（2023年度）をおこない、合わせて、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図る。	
年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 理科分科会では、2023年度生命科学部カリキュラム変更と連動して、新規リメディアル科目の設置、理系教養科目の見直し、時間割の見直しを行う。 諸語分科会では、語学教育の質向上とスリム化対応を目的に、諸語教育のカリキュラム変更に向けた検討を進める 教養教育の充実のために、ラーニングサポータ、授業アシスタント制度を活用する。 	
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 理科分科会では、リメディアル科目の設置と理系教養科目の見直しを含む新カリキュラムを完成させる。 諸語分科会では、新カリキュラムを完成させる。 ラーニングサポータ、授業アシスタント制度を活用する。 	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> 理科分科会では、生命科学部と連携して2023年度新カリキュラムを完成させた。生命科学部の学部共通科目、教職科目の一部を理系教養科目に統合・移行することで、理系教養科目の充実を図った。この統合で捻出したコマを原資として新規リメディアル科目を設置し、英語分科会と協力して、学生が学習しやすい時間割を作成した。 諸語分科会では、新カリキュラムを完成させた。2023年度より新設諸語科目が開講され、語学教育の質向上が実現する。スリム化対応としてのクラス統合は、2023年度より始まり、2025年度に完成する。 人文社会分科会では、国際教養の涵養を目的とする科目「宗教と社会」を来年度に向けて新設した。 リテラシー分科会科目「情報リテラシーと表現技術」の学習支援のために、ラーニング・サポーター制度を活用した。 数学分科会では、理科分科会の2023年度新カリキュラムにおいて、リメディアル科目のクラス増が行われたのに連動して「入門数学」のクラス増を行った。 新カリキュラムに対応したカリキュラムマップ、カリキュラムツリーを作成した。 KLACとして初めて学生モニター制度を利用し、5人の学生から、教養教育カリキュラムの履修状況や理系専門教育との接続、ハイフレックス授業の効果などについて聞き取りを行なった。 合計59の授業で、授業支援アシスタント制度を活用した。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> 諸語新カリキュラムが、適切なクラス人数の下で実施されるよう、時間割の工夫などを引き続き行っていく。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

		<ul style="list-style-type: none"> 引き続き学生モニター制度を利用し、より多様な観点からの意見聴取を図る。 現カリキュラムから新カリキュラムのスムーズな移行を図る。 引き続き、ラーニング・サポーター制度および授業アシスタント制度の有効な活用方法を検討する。
評価基準		教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標		<ul style="list-style-type: none"> 教員による相互チェック体制の充実を図る。 ポスト・コロナを見据えて、COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、効果的な授業形態・教育方法を検討する。
年度目標		<ul style="list-style-type: none"> 継続して授業相互参観の充実を図る。 ハイフレックスを含めた対面授業、オンライン授業、オンデマンド授業を効果的に組み合わせた教養教育を実施する。 ハイフレックスを含めた対面授業においては感染対策を促進する。
達成指標		<ul style="list-style-type: none"> オンライン授業参観も含めた授業相互参観を実施する。 ハイフレックス授業に対応した授業設計や、対面授業における感染対策について、各分科会の意見聴取をおこなう。 理科分科会では、各授業形態の科目数を調べ、各授業形態の教育効果を検討する。
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> 計7科目で授業相互参観を実施した。また、他分科会主催科目の参観にも対応できるよう、報告書の書式を改善した。 科学実験では、動画を含めたオンライン教材を利用することで、対面授業とオンライン授業を円滑に切り替え可能な実習スケジュールを構築した。本年度は「情報リテラシーと表現技術」で学生にPC操作を習得させた上で、「科学実験Ⅰ（物理学実験）」でPCソフト使用法の理解を深める授業間の連携を試み、学習効果を上げることに成功した。 理科分科会管轄の69科目のうち、61科目が対面、8科目がオンラインであった。土曜開講の生物学基礎は、オンライン実施により履修者が顕著に増加した。 諸語分科会では、オンラインと対面による中国語学習者と留学生日本語クラスの相互授業参加・学びあい（発音指導・作文の添削など）を4回実施した。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> 授業相互参観を継続し、FDの一助とする。 COVID-19の感染状況が悪化した場合、科学実験では対面授業からオンライン授業へスケジュールを速やかに切り替えることで、授業の継続を試みる。
評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標		教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。
年度目標		<ul style="list-style-type: none"> 英語分科会では、前年度に引き続き1年次4月と12月、および2年次12月にTOEICテストを行い、継続的に教育効果の測定を行う。また、2020年度および2021年度のオンライン授業実施経験から、ブレンド型学習の可能性を探る。 数学分科会では期末試験が対面実施可能な場合、これまでと同様に統一試験を行っている4科目（24クラス）の素点データの度数分布表を作成する。実施不可能な場合に備え、代替手段も検討する。
達成指標		<ul style="list-style-type: none"> 英語分科会では、1年次4月と12月、および2年次12月にTOEICテストを実施する。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	・数学分科会では、期末試験が対面実施可能な場合、十分なデータが得られた科目の数を指標とする。不可能な場合、代替手段の実施、非実施を指標とする。	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・英語分科会では、前年度に引き続き1年次4月と12月、および2年次12月にTOEICテストを行った。英語プロジェクト委員会では、その結果を各学科の委員と共有し、活用方法を検討した。また、対面とオンライン授業実施経験から、ブレンド型学習を充実させる方法について、教員間の情報交換をおこなった。 ・数学分科会では、期末試験が対面だった科目と対面でなかった科目があり、統一試験は実施できなかったが、線形代数の一部の複数クラスで統一問題の検討・作成を行い、期末試験の問題の統一化を図った。対面による試験と非対面による試験の間の教育効果の測定結果を定性的に比較し検討した。 ・グローバル教育センター（国際交流課）23年秋入学派遣留学選考に2名合格した。1名（理工学部創生科学科2年生）は英語圏に、1名（理工学部応用情報科2年生）中国語圏に派遣することになった。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・英語プロジェクト委員会では、TOEICテスト結果のさらなる活用方法について検討を続ける。 ・数学分科会では、引き続き対面の統一試験の実施を検討し、可能な場合に統一試験を行った科目の素点データを収集・分析する。不可能な場合、代替手段を検討する。
評価基準	教員・教員組織	
中期目標	学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。	
年度目標	今後の教員採用に備え、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にするとともに情報科学部との情報交換を行う。	
達成指標	理工学部・生命科学部執行部との情報交換の機会を設ける。また情報科学部とも状況を共有する。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年度に理工・生命両教授会で作成した申し合わせに基づき、生命所属の教養教員3名の昇格人事を実施した。理工・生命両学部から構成される推薦委員会の主導により、物理の実験教育に携わる理工所属の教養教員の後任人事を実施した。 ・必要に応じて、情報科学部執行部も含めて、メールなどによる情報交換を実施した。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・教養教育担当教員の採用、昇格人事においては今後も同様の体制を取ることが望ましい。 ・次年度も情報交換を継続することが望ましい。
評価基準	教育研究等環境	
中期目標	COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、より効果的な授業設計を図るために、必要な教育研究環境を検討する。	
年度目標	今年度に本格化したハイフレックス授業に対応できる教育研究環境を検討する。	
達成指標	ハイフレックス授業に対応した教育研究環境について、各分科会の意見を聴取する。	
年	教授会執行部による点検・評価	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

度 末 報 告	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・ハイフレックス授業を全面的に実施するにあたり、各分科会が中心となり、職員の協力を得て、兼任講師のサポート体制（機材の接続方法、PCの貸出、トラブル対応など）を充実させた。 ・科学実験の一部のクラスにおいては、実習の出欠や履修態度に問題がある学生を学科に周知するフィードバックを開始した。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・新規採用教員などを対象に、ハイフレックス授業実施のためのサポートを継続する。 ・科学実験のフィードバック体制を活用し、初年次の早期における学生問題発見を図る。
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		行政や地域団体との連携を強化して、交流事業の継続的实施や新たな企画について検討し、地域との交流を深める
年度目標		2年間開催が中止となっていた「スポーツ交流事業」「地域スポーツイベント支援事業」の再開を、COVID-19の感染状況を勘案して検討する。
達成指標		スポーツ交流事業「卓球大会」「軟式野球教室」の開催および地域スポーツイベント「野川駅伝大会」への協力・支援をおこなう。また、次年度に向けて新たな事業の企画を検討する。
教授会執行部による点検・評価		
年 度 末 報 告	自己評価	S
	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍により、2年間中止となっていた地域とのスポーツ交流事業（黄金井倶楽部共催）「卓球大会（R4年11月）」「軟式野球教室（R4年12月）」を開催した。 ・支援事業として地域スポーツイベント「野川駅伝大会（1月）」に大学より法政水（864本）を提供した。
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ交流事業のさらなる展開を図るうえで、緑町グラウンドの利用可否が重要な要素であり、引き続き関係部課へ地域協議会との調整などを要望していく。
<p>【重点目標】 COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、より効果的な授業設計を図るために、必要な教育研究環境の充実を図る。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 KLAC科目は多様であるため、分科会ごとに、科目特性に応じた教育研究環境を検討することで、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図る。そのために、専任・兼任教員間の連絡を密にし、情報共有を図る。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 COVID-19の影響が残る中、ラーニングサポーターや授業支援アシスタント、特に初めてとなる学生モニター制度などの学内制度も活用して、従来の授業運営や学力測定、運営の相互チェックなどを堅実に進めた。さらに、オンライン授業（ハイフレックスを含む）を想定した教育方法の検討や授業設計の実装、兼任講師サポート体制などの充実を図り、重点目標は十分に達成したものと考えている。加えて、新カリキュラムの設計においては旧科目の整理統合と新規科目の設置計画を取りまとめ、また申し合わせに沿った採用・昇格人事を進め、より充実した教養教育を学生に提供する準備が整った。授業間連携や、派遣留学選考合格者の輩出、スポーツ交流イベントの再開など、アフターコロナに向けた取り組みにも注目されたい。</p>		

IV 2023年度中期目標・年度目標

評価基準	内部質保証
------	-------

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。
年度目標	・運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検を行い、内部質保証を維持する。
達成指標	・自己点検委員会を開催する。
評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	カリキュラム変更（2023年度）をおこない、合わせて、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図る。
年度目標	・2023年度に開始した新カリキュラムへのスムーズな移行を図る。 ・新たにスタートした生命科学部対象の理系リメディアル科目（入門数学、入門物理学、入門化学、入門生物学）で、高校での理数科目の知識が不十分な学生に対して、大学教育へのスムーズな移行を図る。 ・ラーニングサポーター制度、授業アシスタント制度、学生モニター制度を継続して活用する。
達成指標	・各分科会では学生の履修状況の把握に努めるとともに、学生の履修指導をおこなう。 ・数学分科会および理科分科会では、リメディアル科目の履修対象者決定にプレースメントテストの成績を活用する。また、プレースメント・テストの結果を収集・分析する。 ・理科分科会では、リメディアル科目受講後の学生の成績を学科にフィードバックする。 ・引き続きラーニング・サポーター制度および授業アシスタント制度を活用し、いっそう有効な活用方法も検討する。 ・引き続き学生モニター制度を利用し、より多様な観点からの意見聴取を図る。
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	・教員による相互チェック体制の充実を図る。 ・ポスト・コロナを見据えて、COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、効果的な授業形態・教育方法を検討する。
年度目標	・授業相互参観の充実を図る。 ・2023年度より対面授業が拡大したことを踏まえて、さまざまな授業形態において、より教育効果の高い授業方法を検討する。 ・ハイフレックスを含めた対面授業においては感染対策を促進する。
達成指標	・各分科会で授業相互参観を実施する。 ・授業形態・教育方法について、各分科会から意見聴取をおこなう。 ・対面授業における感染対策について、各分科会から意見聴取をおこなう。
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。
年度目標	・英語分科会では、継続してTOEICを実施する。 ・数学分科会では、期末試験が対面実施可能な場合、統一試験を実施する。
達成指標	・英語分科会では、1年次4月と12月、および2年次12月にTOEICを実施する。また英語プロジェクト委員会などでその結果を共有し、分析する。 ・数学分科会では、引き続き対面の統一試験の実施を検討し、可能な場合に統一試験を行った科目の素点データを収集・分析する。不可能な場合、代替手段を検討する。
評価基準	教員・教員組織
中期目標	学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

年度目標	今後の教員採用に備え、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にするとともに情報科学部との情報交換を行う。
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・KLAC 将来構想委員会において、理工・生命両学部と連携し、今後の教員採用に備えた体制を整える。 ・情報科学部とも状況を共有する。
評価基準	教育研究等環境
中期目標	COVID-19 の感染状況にフレキシブルに対応できる、より効果的な授業設計を図るために、必要な教育研究環境を検討する。
年度目標	今年度は対面のみでの授業が増えていく中、昨年度まで行ってきたハイフレックス授業で培ってきた教育研究環境を活かしながら、ポスト・コロナにおける教育研究環境を検討する。 <ul style="list-style-type: none"> ・理科分科会では科学実験のフィードバック体制を活用し、早期において、学生の問題点や課題の発見に務める。
達成指標	対面授業とハイフレックス授業の教育研究環境について、各分科会の意見を聴取する。 <ul style="list-style-type: none"> ・新規採用教員などを対象に、対面授業およびハイフレックス授業実施のためのサポートを継続する。 ・科学実験受講者の出欠状況、成績状況、科学実験独自アンケートなどを受講対象の学科に提供する。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	行政や地域団体との連携を強化して、交流事業の継続的实施や新たな企画について検討し、地域との交流を深める。
年度目標	2022 年度に再開した「スポーツ交流事業」の開催と「地域スポーツイベント支援事業」への協力・支援を継続する。
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ交流事業「卓球大会」「軟式野球教室」の開催および地域スポーツイベント「野川駅伝大会」への協力・支援をおこなう。また、次年度に向けて新たな事業の企画を検討するために地域協議会などとの連携を引き続き継続する。
<p>【重点目標】 学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図るため、ラーニングサポーター制度、授業アシスタント制度、学生モニター制度を継続して活用することで新カリキュラムへのスムーズな移行を図る。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 学生モニター制度による意見聴取、ラーニングサポーター制度や授業アシスタント制度による履修指導をおこなう。また、新たにスタートした生命科学部対象の理系リメディアル科目（入門数学、入門物理学、入門化学、入門生物学）において、履修状況の把握に努めるとともに、プレースメントテストを活用した履修指導をおこなう。</p>	

【大学評価総評】

【教育開発・学習支援センター】

2022 年度中において、教育開発・学習支援センターが「教員・教員組織」および「教育研究等環境」の領域に設定した 37 個もの目標を、効率的に実施し、達成されたことは高く評価できる。2023 年度以降もコロナ後の教育環境の変化を的確に捉え、「AI 技術への教育学習指針の検討」を軸に、教員の授業運営に資する指針を早い段階で提示することを目標にしたことは、AI 時代を反映した精確な活動となりえよう。AI の精緻化に伴い、各所で困難な問題を孕むことは必至だが、一層の活動と成果を期待される。

【市ヶ谷リベラルアーツセンター：小金井リベラルアーツセンター】

市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）、小金井リベラルアーツセンター（KLAC）の両センターは、設立当初より教育方法に工夫を凝らし、新型コロナウイルス禍下においても教育・研究

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

環境の充実をはかってきたことは評価できる。

ILACにおいては、授業科目のスリム化や学部専門科目との乗り入れなどを積極的に検討されている姿勢を高く評価したい。昨年度については特に ILAC300 番台科目（学部専門科目）である教養ゼミの在り方や制度を再確認し、将来の履修者数増加に資するための課題解決に積極的に取り組まれた点も評価したい。2023 年度も分科会や学部をはじめとする関係部局との調整を鋭意積み重ねられることに期待したい。

KLAC では、学生の多様な価値観を育成するという明快な目的意識の下に、教養教育の改善が着実に図られてきたことは高く評価できる。2023 年度からの新カリキュラムで、リメディアル科目については従来の数学、物理分野のクラス数の増加や化学・生物学系科目の新設が行われ、加えて人文系科目「宗教と社会」の追加、リテラシー科目におけるラーニングサポーターの導入などの様々な改革が行われており、さらなる教養教育の充実の実現が期待される。

【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

2023 年度自己点検・評価シートに記載された Ⅱ 自己点検・評価（1）点検・評価項目における現状を 確認	法令要件やその他の基礎的な要件が充足していることが確認できた
< 法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目 >	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。